編集後記

孟子（前三七二―前二八九）の言葉に、こうあります。

「道は爾きに在り。而るに諸を遠きに求む。事は易きに在り。而るに諸を難きに求む。」と。

直訳すると、「人の道はごく身近なところにあるのに、人はわざわざこれを遠いところに求める。人のなすべきことはごく容易なことであるのに、人はわざわざ困難なことを求めようとする。」ということです。

これを踏まえて、『鶴林玉露』に尼悟道の作と伝えられる「道不遠人（道は人に遠からず）」と題する詩があります。

尽日尋春不見春　　尽日　春を尋ねて春を見ず
芒鞵踏遍隴頭雲　　芒鞵踏遍す隴頭の雲
帰来笑撚梅花嗅　　帰り来たり笑って梅花を撚って嗅げば
春在枝頭已十分　　春は枝頭に在りて已に十分

「春の気配を感じようと、一日中、山野を歩き回ったが、どこにもそれらしいものも見つからずじまい。けれども我が家に戻ってみると、庭の梅のつぼみがふくらみ、すでに春をつげていた。」というものです。

いずれも、考えさせられる文章です。

さて、本号には本館の活動の一端をご理解して頂くために、平成二〇年四月一九日に開催された「国立公文書館所蔵資料特別展講演会」での大濱徹也　国立公文書館特別参与の『身体の近代史』を掲載しました。

また、和田純　神田外語大学教授による『日本国内所在の歴史資料の現状と課題：アジア歴史資料センターから見えてきたもの』を掲載しました。本館では、役職員月例の「研究連絡会議」を開催しており、これは平成二〇年五月一六日に講師としてお招きした際の講演記録です。